

中臣遺跡発掘調査概報

昭和60年度

京 都 市 文 化 観 光 局
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

多数の文化財と優れた伝統文化の継承に幾多の労をついやしている歴史都市「京都」は、より活力ある豊かな近代都市建設にむかって発展の取り組みを強めているところであり、更に平安建都1200年の歴史的節目を8年後に迎えようとしております。

この平安建都1200年記念事業並びに21世紀の理想のまちづくり計画は、都市の優れた伝統のうえに新しい創造を加えるもので、市民が一体となって取り組んでいるところです。

しかしながら、まちづくりの基幹としての「都市建設事業」は、歴史的文化遺産の保存と継承に大きな影響を与えるもので、本市では埋蔵文化財の保存については、市民の理解と協力を得て行っており、また保存し難い遺跡の調査についても市民の協力を得ているものです。

この調査概報は、昭和60年度国庫補助事業として実施した発掘調査の概要をまとめたものであり、本書が埋蔵文化財の研究に、また有用な資料としてご活用いただければ幸いです。

本調査の実施にあたり調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、及び御指導いただいた関係各位、並びに市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和61年3月

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、昭和60年度文化庁国庫補助事業における中臣遺跡発掘調査の概報である。
- 2 発掘調査は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し、同研究所がこれを実施した。
- 3 発掘調査は3箇所実施した。調査次数は、61次・63次・64次調査である。
- 4 図中に使用した方位・座標は、平面直角座標系VIによる。
- 5 標高は海拔高T.P.を使用した。
- 6 本書中の地図は、京都市長の承認を得て、京都市計画局発行の都市計画基本図（2500分の1）勸修寺を修正して使用した。
- 7 61次調査は菅田 薫、63・64次調査は木下保明・丸川義広が担当した。
- 8 本書中の写真は、遺構・遺物とも牛嶋 茂が撮影した。
- 9 本書の執筆・編集は、菅田・丸川が担当した。

本 文 目 次

I	61次調査	
	1 調査経過	1
	2 遺構・遺物	2
	3 まとめ	3
II	63次調査	
	1 調査経過	4
	2 遺構	5
	3 遺物	8
	4 まとめ	9
III	64次調査	
	1 調査経過	10
	2 遺構・遺物	10
	3 まとめ	12

図版目次

- 図版 1 遺跡 調査位置図
図版 2 遺跡 航空写真
図版 3 遺跡 1 61次調査全景
 2 方形周溝墓北溝遺物出土状態
図版 4 遺跡 1 63次調査全景
 2 全景
図版 5 遺跡 1 1号住居址
 2 2号住居址とSB2
図版 6 遺跡 1 64次調査全景
 2 SK1
図版 7 遺物 63次調査出土遺物

挿図目次

- 図1 61次調査区位置図……………1
図2 61次調査遺構実測図……………2
図3 出土土器実測図……………3
図4 周溝断面図……………3
図5 63次調査区位置図……………4
図6 63次調査遺構実測図……………5
図7 1号住居址実測図……………6
図8 1号住居址カマド実測図……………7
図9 出土土器実測図……………8
図10 鉸具実測図……………9
図11 64次調査区位置図……………10
図12 64次調査遺構実測図……………11
図13 SK1・SK2断面図……………12

I 61次調査

1 調査経過

山科区勸修寺西栗栖野町26-6、28-3に所在する勸修寺特定郵便局が改築されるに伴い昭和60年4月2日試掘調査を実施した。その結果、弥生後期の土器を包含する溝状の落ち込みを確認した。

当該地は栗栖野集落が立地する低位段丘面上に位置し、これまでの中臣遺跡の調査成果からは比較的遺構密度の希な地域であった。調査地の西側に接する駐車場（38次調査）では、東西11.5m・南北11.3mの方形周溝墓が調査されており、今回試掘調査で検出された落ち込みも方形周溝墓と推定された。

発掘調査は4月6日より開始した。重機により整地層・耕土などを除去・搬出した後、手掘りにより調査を進め、11日全景写真の撮影を行ない、以降補足調査の後、4月18日すべての現場作業を終了した。

調査対象地は196㎡であったが、排土置き場を考慮し、東西18m・南北5.5mのトレンチを設定、調査の進行に伴い一部拡張を実施し、最終的な調査面積は113㎡であった。

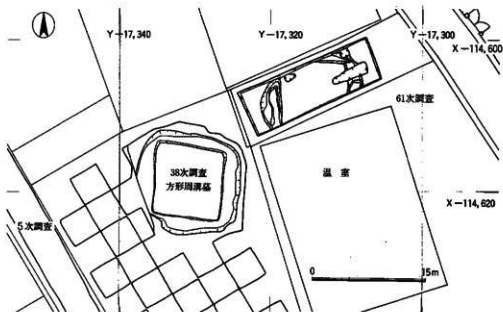


図1 61次調査区位置図

2 遺構・遺物
 層序は極めて単純で積土・耕土層が30から50cm、暗灰色泥砂層が10から20cmの厚さで東から西に向けて厚く堆積している。この暗灰色泥砂層からは近世の染付片が出土している。以下無遺物層である黄褐色泥土層となり、遺構はこの黄褐色泥土層を切り込み検出された。また遺構面は東から西に向け僅かに傾斜している。

遺構は方形周溝墓1基を検出した。南側周溝および北側の周溝の西半分は調査区外となるため、周溝が全周するかは不明である。規模は溝の心々で東西11.5m、周溝の幅は1.8から3.0m。深さは東・西側の周溝は浅く15から30cmであるが、北側周溝は東北コーナ

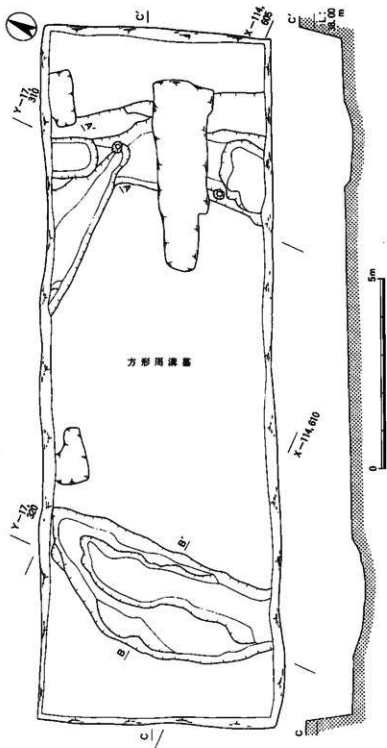


図2 61次調査遺構実測図

一部から深く掘られ約50cmの深さをもつ。周溝の内壁側は直線的で壁面も鋭く立ち上るが、外側の壁は浅く斜めに掘られ不整形を呈している。主体部・封土は後世の削平により検出できなかった。しかし溝内堆積土層の観察により、すべて内壁側からの堆積を示す土層が確認でき、マウンドの存在が推定できた。

遺物は西側周溝中央部、北側周溝の東側から第V様式の壺・甕が出土している。これらの土器はすべて溝底より約10cm浮き、破碎された状態で出土している。

3 まとめ

今次調査では弥生時代後期の方形周溝墓1基を検出した。当該期の方形周溝墓は、15次調査（1基）、27次調査（2基）、38次調査（1基）で確認されている。15次調査地点は低位段丘の西南側、旧安祥寺川に面した低地に位置し、27次・38次・今次調査地点は低位段丘面上に立地する。この2地点が中臣遺跡における弥生時代後期の墓域であることが明らかとなり、今次調査の成果は、当遺跡の集落構造を明らかにしてゆく上で、貴重な成果となるものといえる。

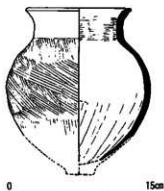


図3 出土土器実測図

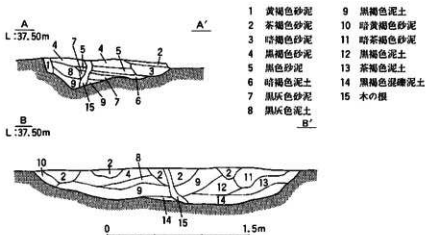


図4 周溝断面図

Ⅱ 63次調査

1 調査経過

本調査は宅地の造成工事に伴う事前調査である。調査地は山科区勸修寺西金ヶ崎93Aで、栗栖野集落が立地する低位段丘の西南側、旧安祥寺川沿いの低地にあたる。この付近は現在も水田・畑に利用されており、調査地も調査前の地目は畑であった。

今次調査地の周辺における既往の調査としては、北接地での宅地造成に伴う調査（33次調査）、南側道路部分の調査（3次調査）、東側道路部分の調査（5次調査）等をあげることができる。このうち、33次調査では遺構はみられなかったが、3次調査・5次調査では古墳時代前・後期の竪穴住居址や掘立柱建物・溝・土壌等が検出されている。特に、5次調査では北西から南東方向に桁行をもつ建物が検出されており、今次調査地ではその西北妻部分が検出される予定であった。

調査は昭和60年9月24日より始めた。重機によって表土を排除した後、手掘りによって調査を進めた。10月12日に全景写真を撮り、以降は実測図の作成と、住居址・柱穴等の断面割りを行い、10月18日をもって現場での作業を終了と

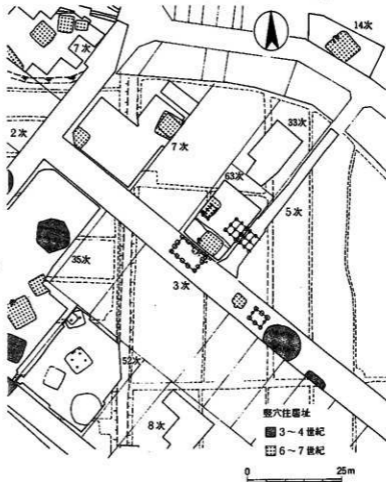


図5 63次調査区位置図

した。調査面積は約210㎡である。

2 遺構

基本層序は、上から70cmまでが畑の耕土とその盛土層、その下20cmが旧耕土・床土層となっている。遺構検出面は現地表下約90cm(海拔29.20m付近)にあり、調査区の中央から北半分では黄褐色泥土層、南半部では灰色砂礫層がみられた。地山となる両層の関係は、前者の泥土層が後者の砂礫層上に堆積していることを確認した。

今次調査で検出した主要遺構は、竪穴住居址2・掘立柱建物2・柱穴15・土壇10・溝3、等である。

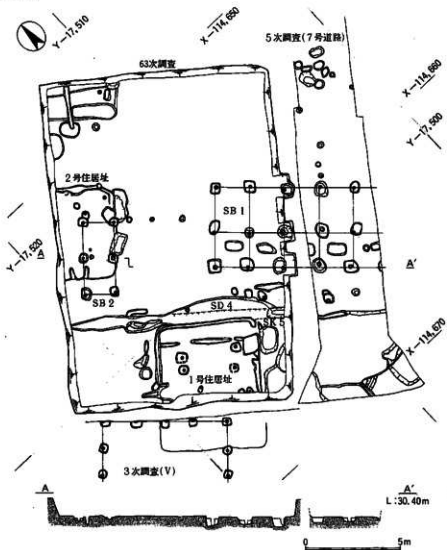


図6 63次調査遺構実測図

1号住居址 調査区の南西端でその東半分を検出した。カマド方向で、長さ5.5mを測る。平面形は正方形とみられ、床面まで深さ20cmを有する。壁溝は、北西・北東・南東の3方で検出した。幅20~30cm、深さ5cm前後を有するが、北東壁ではこれより約1m内側でも同様の溝SD3を検出した。柱穴は4個ある。いずれも隅丸方形の掘形を有し、この中には直径15cm程度の柱痕跡が明瞭に認められた。柱間の距離は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で2.9m、 $P_1' \cdot P_2'$ 間で2.7mを測る。 $P_1' \cdot P_2'$ は建て替えに伴う柱穴と考えられる。カマドは住居址の北西壁に付設されている。上部は押しつぶされている

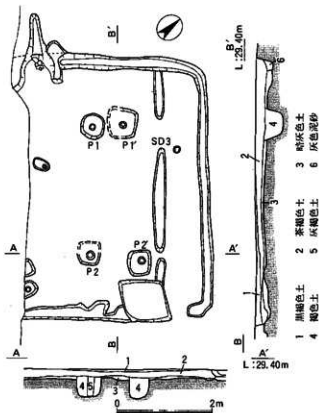


図7 1号住居址実測図

が、下部は比較的残りが良い。焚口部で幅65cm、袖頂部から燃焼部底まで深さ40cm、焚口部から煙道部まで長さ約2mを有する。燃焼部付近の両袖内面は良く焼けて赤変しているが、煙道部には変化がみられない。燃焼部中央で土師器甕(図9-8)・甗の破片が重なって出土した。燃焼部上面で長径50cmのピットを検出したが、支柱等の施設は認められなかった。袖部の下層には遺物を含む層がみられたので、このカマドも当初のものを造り替えたものと判断できる。このように、1号住居址は壁溝や柱穴、カマドの状態からみて、当初のものが北東方向にそのまま移動して建て替えられたことが想定できた。

2号住居址 調査区の北西壁にかかり、その東半分を検出した。住居址の残存状態は極めて悪く、わずかに北東・南東壁の壁溝及びカマド、柱穴等をとどめる程度であった。また北側では土壌の切り合いがみられ複雑な状況を呈していた。床面は極めて不明瞭で、検出時には地山の砂礫層が露出する箇所もみられた。壁溝は北東壁と、南東壁の一部で認め

られた。幅20~30cm、深さ5cmを測る。柱穴は2個ある。一辺40cm程の掘形中央に、直径15cm程の柱痕跡が認められた。柱間は2.3mを測る。カマドは軸部と燃焼部をとどめる。両軸部は幅60cmを測る。内面は赤変していない。燃焼部は深さ10cmを有し、底部付近には厚さ5cm程の炭層が堆積していた。カマドの上部や煙道部の構造は、削平が著しいため不明である。なお、住居址北西部の床面で土師器鍋(図9-12)の破片がまとめて出土した。

SB1 調査区の南東壁にかかり、その西北妻部分を検出した。調査区では桁行2間、梁間2間分あり、5次調査7号道路部分の調査成果と合せると、桁行5間以上で北西-南東方向(W46°N)に桁行をもつ建物であることが明らかとな

った。柱穴は北・南の桁行列のものが方形を呈し、一辺60cm前後、深さ約50cm程であるが、中央列のものは規模が小さく、径30cm程の円形を呈する。各柱穴とも中央あるいは一方に片寄ったところで、直径15~20cmの柱痕跡が明瞭に認められた。

柱間は、桁行方向が1.81m、梁間は北側が2.39m、南側が1.81mを有する。中央と南側の柱穴の間には各々桁行方向に細長い柱穴が認められた。この柱穴は既往調査区でも確認されており、本建物に伴うものであることは明らかであるが、規模に比べ浅い(一20cm)ことや柱痕跡が未検出であること等の点で共通しており、その性格が目ざれるところである。

SB2 2号住居址の上面で検出した。桁行2間、梁間1間の小規模な建物で、北西側を一部拡張して調査したが柱穴は続かないことを確認している。方位はN41°Eである。柱穴は一辺50~60cm前後の方形を呈し、この中央に直径15cm前後の柱痕跡が認められた。各柱穴の深さは約20cm程である。柱間は、桁方向が1.88m、梁間が1.65mを測る。

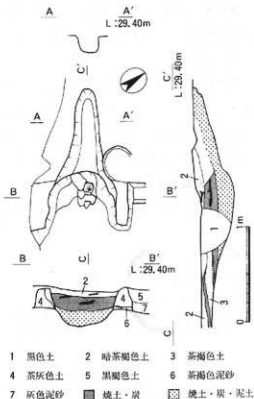


図8 1号住居址カマド実測図

SD4 調査区の南側で検出した北西—南東方向 (W40° N) の溝である。幅30~40cm
深さ10cm前後で、南東壁付近で1段深くなり5次調査区に延びている。

3 遺物

整理箱に4箱分ある。主に竪穴住居址や土壌・溝・柱穴の埋土等から出土しているが、
まとまったものはない。遺物の内容は古墳時代後期に属する土師器・須恵器が大部分で、
この中では土師器が圧倒的に多い。器形をみると、土師器では甕・甔の他に、杯・碗・鉢・
高杯等がある。須恵器では杯・蓋・甕の他に、高杯・器台・琖等も若干出土している。

1号住居址出土土器 須恵器甕 (1・2)、ともに残存4分の1以下の破片である。

(1)は口径12.2cm、(2)は口径13.2cm、器高3.4cmを測る。(2)は天井部にヘラケ

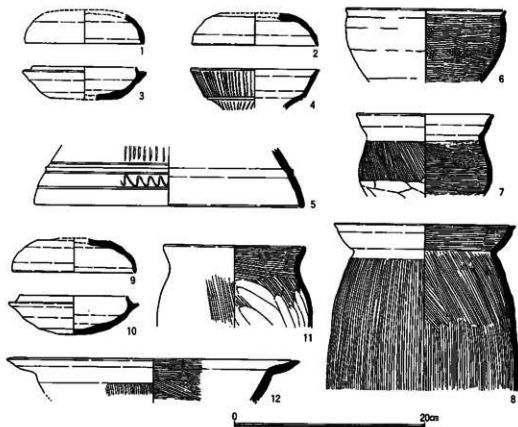


図9 出土土器実測図 1号住居址 (1~8)、SD4 (9・10)、
SK5 (11)、2号住居址 (12)

ズリを施す。杯(3)は口径11.0cm、器高3.4cmあり、底部はヘラ切りのまま不調整である。碗(4)は大きく外上方に開く口縁部を有する。外面にヘラ描き条線文を施す。口径13.2cmを測る。器台(5)は脚端部の破片で、脚径は複原で28cmに及ぶ。外面に凸帯と凹線をめぐらせ、この間にヘラ描きの条線文や波状文を施す。

土師器鉢(6)は内湾する体部を有する。外面はナデ・オサエ調整で粘土紐の継ぎ目がみられる。内面はヨコハケを施す。口径16.7cmを測る。甕(7)は小さ目の体部に外上方にのびる口縁部をもつ。体部外面はタテ方向にハケを施した後、下半部をヘラケズリする。内面はヨコハケを施す。口縁部の内外面はヨコ方向にナデる。口径14.2cmあり、外面には煤が付着している。甕(8)は長胴甕と呼ばれるものである。張りのない体部に内湾気味の口縁部をもつ。体部内外面はタテハケを施し、口縁部は内面にヨコハケを施した後に内外面をヨコ方向にナデる。口径19.0cmを有する。

SD4出土土器 須恵器蓋(9)は口径13.0cm、器高3.6cmを有する。天井部はヘラ切りのまま不調整である。杯(10)は口径11.3cm、器高3.6cmで、底部はヘラケズリを施す。

SK5出土土器 土師器甕(11)は張りのない体部に外反する口縁部をもつ。口縁端部は肥厚する。体部外面はタテハケ、内面はタテハケの後、ヘラケズリを施す。口縁部は内面にヨコハケを施す。口径14.7cm。

2号住居址出土土器 土師器鍋(12)は浅い体部に外反する口縁部をもつ。口縁端部は薄く外方へ突出する。外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。口縁部は内面にヨコハケを施した後に内外面をヨコ方向にナデる。口径30.0cmを有する。

1号住居址出土鉄器 1号住居址の東半区の覆土中より出土した。馬具のうち革紐の先端に取り付けられる鉸具とよばれるものである。径7mm程の鉄棒を折り曲げて輪金とするが、基部に取り付く尾錠は出土していない。長さ6.7cm、幅2.3cmを測る。



図10 鉸具実測図

4 まとめ

今次調査では、特に掘立柱建物SB1の西北妻部分を確認するなど、予定された位置で住居址や建物跡を検出し、古墳時代後期中の臣遺跡の様相を知る上で貴重な資料を得ることができた。また、出土遺物中には須恵器碗や器台、あるいは馬具(鉸具)等が含まれており、これらは通常後期古墳から出土するものであるだけにその存在が注目される。

Ⅲ 64次調査

1 調査経過

本調査は宅地の造成工事に先立つ事前調査である。調査地は山科区勸修寺西栗栖野町45-33・34、西金ヶ崎86-3・4で、栗栖野集落が立地する低位段丘面の南西端部分にあたる。本調査地の東側で実施した発掘調査(27次調査)では、方形周溝墓が2基見つかり、また調査地のすぐ西側には後期古墳と推定される伝宮道烈子墓が所在しているところから、本調査地においてもこれらと関連する遺構の存在が予想されるところであった。

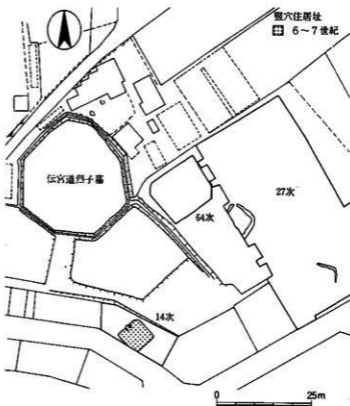


図11 64次調査区位置図

発掘調査は昭和60年11月1日より始めた。表土層が極めて薄いことから手掘りによって調査を進め、畑の耕土層を排除して遺構検出を行ったが、土壌を3基検出した他は、最近までの耕作に伴う溝・土壌・ピットを多数検出しただけで、古墳や周溝墓といった遺構は検出できなかった。11月15日に全景写真を撮り、同日中に機材を引き上げ終了とした。調査面積は約100㎡である。

2 遺構・遺物

調査区の基本層序は極めて単純で、上から約20cmが畑の耕土層、その直下が地山の褐色泥土層となっている。褐色泥土層は厚さが30~40cmあり、この層の下には黄褐色を呈する礫を含んだ泥土層がみられた。遺構は褐色泥土層の上面で検出した。

今回の調査で検出した主要遺構は、黒褐色泥土層を埋土とする土壌3基で、この他には

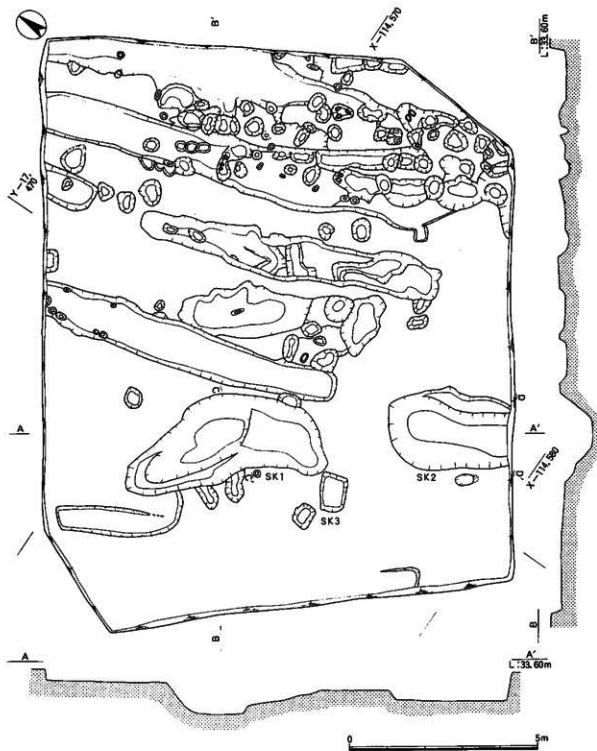


图12 64次調査遺構実測図

最近までの耕作によって生じた遺構
(溝・土壕・ピット) が多数ある。

SK1 調査区の中央西寄りで検出した。長さ5.4m、幅は中央部で2.0mを有する弧状の土壕である。深さは中央部で検出面より90cmある。底はゆるやかなU字形で、長軸方向には段をもつ。埋土は黒褐色泥土層(3)を中心に、これに地山の褐色泥土層(6)が混じった茶褐色泥土層(4)や褐色砂泥層(5)がみられた。特に(4)・(5)の層は底部や肩部の斜面に堆積していた。

SK2 調査区の南東壁付近で検出した。長さ1.55m以上あり、幅は中央部で1.0mを有する。深さは検出面より60cmあり、底はゆるやかなU字形を呈する。北西側の肩部にはテラス状の段をもつ。埋土は黒褐色泥土層(3)を中心にみられたが、底部や肩部付近ではSK1と同様の茶褐色泥土層(4)の堆積する箇所も認められた。埋土中より土器の小片が3片出土した。

SK3 SK1に接しその南側で検出した。長さ50cm、幅35cmの長方形を呈する。深さは検出面から15cmあり、底は平坦である。埋土は黒褐色泥土層であった。

出土遺物は極めて少なく、整理箱1箱分(遺物袋4袋)にとどまった。いずれも弥生土器あるいは土師器とみられる土器の破片である。このうち、SK2から出土したものは胎土に砂粒を含み内外面をハケメ調整しており、弥生時代中期のものと考えられる。

4 まとめ

今次調査地ではその周辺に周溝墓や古墳が存在することから、これらに関連する遺構の検出が期待されたが、耕作に伴う遺構を多数検出しただけで、黒褐色泥土層を埋土とする遺構は土壕3基を検出したにとどまった。このうち、SK1・SK2は形態や埋没の状態からみて同じような性格をもつ土壕と考えられるが、出土遺物が極めて少ないこともあってそれらの年代や性格を十分に把握するには至らなかった。

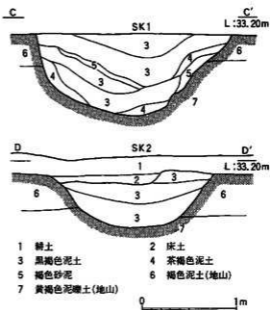


図13 SK1・SK2断面図

图 版



調査位置図



航空写真（南西から 昭和61年3月撮影）



1 61次調査全景（北東から）



2 方形周溝墓北溝遺物出土状態（北東から）



1 63次調査全景 (北東から)



2 同 全景 (南東から)



1 1号住居址 (南東から)



2 2号住居址とSB 2 (南東から)



1 64次調査全景（北から）



2 SK 1（北から）



中臣遺跡発掘調査概報

昭和60年度

発行日 昭和61年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町

TEL (075) 415-0521

印刷 真 陽 社